

渡島半島のヒグマ春季管理捕獲について

～道の対策チームに聞く～

〈研究機関〉 環境科学研究センター自然環境部 野生動物科長 間 野 勉さん
〈行 政〉 環境生活部環境室 環境生活部環境室 主 幹 森 田 謙 一さん
自然環境課野生生物室 野生生物係長 大和田 収さん
(聞き手・文責 編集部)

要旨

- (1) 捕獲は四頭(雄一、雌三)で、歯止めである実施方針の上限を大幅に下回った。雪解けが異常に早かったことが大きく影響したが、ほかにいくつかの課題も明らかになった。
- (2) とりわけ、ハンターの減少・高齢化により、実際にヒグマ対策にあたる従事者不足が深刻な問題であることが、あらためて浮き彫りにされた。
- (3) 総合的対策を進めるために、地元の意識変化を促す施策の充実、さらに世論の盛り上がり期待される。

△前 文▽

道は「渡島半島地域ヒグマ保護管理計画」に基づき「春季の管理捕獲」を二〇〇二年から三年間の試行として始めた。一年目は三月二日から四月三〇日までの四日間、渡島・檜山・後志管内の二九市町村を対象地域として実施され、捕獲は四頭だった。実施の状況、浮かび上がった問題点、これからの課題などについて、北海道のヒグマ研究業務を担当する道環境科学研究センター自然環境部野生動物科長の間野勉さん、行政担当の道環境生活部環境室自然環境課野生生物室主幹の森田謙一さん、同室野生生物係長の大和田収さんに聞いた。

(インタビューは〇二年十二月十八日に行い、その後の状況変化も一部盛り込んだ)

雪解け早く足跡捜しに苦労

捕獲の現場を追ったテレビ映像を見て、撃つたのが雌の子グマと分かり、悔やむハンターの姿が印象的でした。

子グマの定義ですが、私たちは母グマと一緒にいるクマを子グマとし、母親から別れた二歳から四歳ぐらいの若いクマを若齢個体と呼んでいます。あのクマは子グマではなく、若齢個体でした。

一年目の捕獲四頭(雄一頭、雌三頭)の詳しい内容は。

雄は島牧村で捕獲した八歳一頭、雌三頭は瀬棚町の一〇歳一頭、残り二頭は若齢個体で函館市と厚沢部町での捕獲でした。

捕獲の上限数は雄三九頭、雌一〇頭。結果とは随分開きがあります。また主な狙いは雄なのに、雌の方が多くなった。原因は。

雪解けが例年になく早く、クマの足跡を見つけてくることが大きき影響したものと考えられます。

雄雌の識別は、過去の研究データから、雄は満二歳以上では前掌幅が概ね十三センチを超えますが、雌は成獣となっても十三センチは超えないということを目安にしました。ところが本年は雪が少なく、足跡の識別が難しい状況でありました。

道からは、すべての捕獲現場へ研究員等が赴き、捕獲状況等について詳しく調査をしています。テレビで放映されたケースは、捕獲従事者の方々が大形のクマを狙い、追い詰めたところ、出てきたのは別の小さい個体(雌の若齢個体)であったというものでしたが、最初から小さいと分かって狙っ

たわけではなく、積雪のある条件ならば、現場付近に、この小さいクマもいることが分かったと考えられます。また、瀬棚町で捕獲された雌の成獣は、雪に残った足跡がジワッと広がって大きくなつてしまつたようです。

(積雪と捕獲数の関係については別掲の囲みを参照)

春グマ駆除とは大きい違い

——一九九〇年に春グマ駆除を廃止してから「十年ぶりの再開」と注目され、「絶滅政策の再開」との懸念の声もありました。予想外と思える結果をどう受け止めていますか。よく誤解されますが、「春季の管理捕獲」と

「春グマ駆除」とはまったく違います。かつての春グマ駆除は、六二年(昭和三七年)の冷害、十勝岳噴火の降灰などに伴うヒグマ被害の激増を背景に、六六年から、ヒグマの生息数の減少を図ることを目的とし、捕獲対象や捕獲総数に制限を設けず、時期は捕獲しやすい春の三月十五日から五月末までという内容です。

「累積積雪深と捕獲頭数」

間野さんの調査分析によると、春グマ駆除による捕獲数と残雪指標の回帰分析から、双方の間に高い相関が認められ、春グマ駆除による捕獲成功には積雪条件が深く関わつていたことが明らかになった。

また、回帰式から、〇二年の気象条件下では、春グマ駆除実施時期においても、管理捕獲と同等の結果になつていたことが推測される。

それによると、まず、春グマ駆除時点での捕獲の成否は、獲物であるヒグマの個体数(豊富さ)のほか残雪の状況が大きく影響すると考えられる。

そこで、一九六六年〜八七年の捕獲統計から、ヒグマの個体数に負の影響を与える要因として一定期間前の捕獲数(前年の総捕獲数と前前年

の総捕獲数)、また捕獲の効率に直接影響する要因として残雪状況を取り上げ、捕獲数との相関について分析した。

残雪指標は渡島半島基部の黒松内における毎年三月一日から五月三十一日までの累積積雪深を利用した。分析の結果、残雪指標だけが春季の捕獲数と有意な相関を示し、捕獲

成功には、残雪の多寡が大きく影響していたことが裏付けられた。〇二年春は融雪が記録的に早かつたといわれる。

この気象条件が捕獲に与えた影響を、この回帰式を用いて検討すると、積雪条件(残雪指標四二五センチ)から予想される捕獲数は一九・七頭となる。

春グマ駆除とは捕獲に対する規制

が異なるため、今回の管理捕獲で規制された穴狩り、複数行動個体(母獣と幼獣)の分を除外し、さらに三月二〇日以前と五月一日以降に捕獲された分を除外すると、今回の春季捕獲と同じ手法・対象・期間で捕獲された個体は春グマ駆除の四九%を占めた。

これは一九・七頭の四九%にあたる九・七頭が捕獲されることを意味する。また、渡島半島地域においては、一般有害駆除による捕獲により、期間中七頭が捕獲された。

これを予測値の九・七頭から除くと一七頭となり、実際の捕獲数四頭とよく一致する。

この結果から、春グマ駆除当時でも、〇二年の気象条件下では、今回と同様の結果になつたと予測される。

残雪の多寡が捕獲数に大きく影響

また、渡島半島地域においては、一般有害駆除による捕獲により、期間中七頭が捕獲された。

これを予測値の九・七頭から除くと一七頭となり、実際の捕獲数四頭とよく一致する。

この結果から、春グマ駆除当時でも、〇二年の気象条件下では、今回と同様の結果になつたと予測される。

これに対し、今回は「生息数を減少させること」が目的ではないので、狩猟方法や捕獲数等を制限するとともに、捕獲従事者の安全性等も考慮し、班編成を三人一組としました。また、「絶滅回避」のため、雌及び親子連れは捕獲しないことを大前提とし、子連れの雌を捕獲する可能性が高い穴狩りの禁止や、複数で行動している場合には雌と子どもとの可能性が高いので追跡をしないこととしています。

春季管理捕獲の狙いは、行動圏が広く、夏から秋にかけて人里周辺に出没し問題行動を起こしやすい雄であることから、事故、被害の未然防止効果が大きい雄を重点的に捕獲することとし、九〇年から十一年間の雄の平均捕獲水準である三九頭を上限としました。

ヒグマは三、四歳で雌雄の差がはっきりし、残雪期は雪上の足跡を目安に識別が可能ですが、百パーセントの識別は不可能で、雌を獲ることもありえます。このようなことから、シミュレーションを行い、年間雌一〇頭であれば、現行の捕獲水準(雌は年一九・五頭)に上乘せさせ

れたとしても、三年間の試行期間に生息数の大きい減少には至らないと考えています。

マスコミでは、捕獲数の上限のことを捕獲目標のように伝えられますが、これは目標ではなく歯止めであり、雌の捕獲数が一〇頭に達すれば、その時点で管理捕獲をストップするという仕組みです。

そうした狙いから見ると、四頭という結果は、上限を大幅に下回り、絶滅回避という点では問題のないものでありましたが、今年の結果については、捕獲数が多かった二〇〇一年の翌年ということもあり、三年間の試行の中で考察していく必要があると考えております。

—その後の出没状況はどうなりましたか。

十一月末までの今年の捕獲数等につきましては支庁で整理中であり、〇三年一月中旬に暫定値がまとまります。〇一年の捕獲数は、全道で四八二頭という異常な多さでしたが、春先に四件の人身事故があり、住民の皆様が敏感になっておられたこと、携帯電話の普及で通報数が増えたことなどの事情が考えられます。また、〇二年も平年よりはやや多かったのではという感じです。

ハンターの減少・高齢化は深刻

—春グマ駆除廃止から十三年のブランクがあり、ハンターが足りないといよく聞きます。現場の実施状況はどうでしたか。

対象となる二九市町村のうち申請が出されたのは一九市町村、うち二町は実際には出動できず一七町村で実施されました。出動できなかった自治体では、三人一組という班編成ができなかったか

らです。

ハンターの減少と高齢化はかねてから指摘されてきましたが、問題の深刻さをあらためて再認識させられました。このままでは、人里に出てきた個体を撃たざるを得ない時、撃てる人がいないという事態になりかねません。また、あるベテランハンターの方は「以前は毎年春に山を歩き、クマの動きもよく分かっていたが、造林地が成長し見通しが利かなくなるなど、山の様相が全く変わっている。」と驚いておられました。これまで全く山に入っていないので「今年の様子見」というハンターの方もいました。

今年には雪解けが早かったため、期間中に多くの山菜採りの人が入山されました。私たち道の担当者も、期間中の土日を中心として、管理捕獲が実施されている地域等に入り、山菜採りの皆様に、事故に遭わないための注意事項について、チラシを配布する等して、広く呼びかけました。また、

北海道

山菜採り
深淵釣り……

山林ではヒグマに注意

山火事注意！

昨年道内では、善先の山菜採りで、2名の方が、ヒグマに襲われなくなっています。北海道の山林の多くは、ヒグマの生息地であり、山林内では常に注意を払う必要があります。
山菜採りなどで山林にお出かけになる場合は、事故防止の対策として、次の「こと」に注意ください。

- 目立つ服装をし、単独では行動しないようにしましょう。
- 見過しの悪い場所での作業は避けましょう。
- 音を出して自分の存在をまわりに知らせる工夫をしましょう。
- 朝夕はヒグマの行動が活発になりますので避けるのが無難です。
- ヒグマを引きつけるといわれる「ワシ」は絶対に使わないでください。
- チクマを見つけても、決して手をふれず、すぐその場を離れましょう。

お知らせ

ヒグマ対策の一環として、今年三月二十一日から四月三十日までの間、渡島・樺山支庁管内及び後志支庁の黒松内町、豊牧村、寿都町の山林内で、銃器によるヒグマの捕獲作業が行われます。



渡島支庁
環境生活課自然環境係
郵便番号 040-8558
旭川市東照4丁目5の16
電話 0133-47-9000 内線 2977

樺山支庁
環境生活課自然環境係
郵便番号 043-8558
樺山郡江刺町字神倉町 336の3
電話 01395-2-1010 内線 2977

なお、入林の際は、地元市町村などでヒグマの出没情報などを確認しましょう。詳しくは各支庁の市役所、町村役場、各支庁自然環境係までお問い合わせください。

捕獲従事者の方々の御努力もあり、悪条件の中ではありましたが、事故なく終了することができました。

——一年目の結果を踏まえ二年目から改める点は、またどう検証していきますか。

「春季の管理捕獲」の基本的な骨組みは変えないこととしています。管理捕獲は三年間の試行としており、その検証を行うためです。

要望はいろいろ出ていますが、捕獲従事者の方々からは、もっと機動性を増すために班体制（三人体制）のあり方の検討、また、入林手続きは直前まで出せるようにしてほしい等の声がありますが、事務の簡素化等にはできる限り対応したいと考えています。

期間・時期については、後志支庁管内は他の地域に比べて少し気候が異なりますので、地元から要望がある場合には、検討したいと考えています。検証は重要なので力を入れていきます。

今回の管理捕獲の試行にあたり、地元の三支庁の担当者をはじめとして本庁の担当者や研究機関の研究者、さらに全支庁に配置している獣医師資格を持った職員も動員し、期間中の土日一四日間に延べ八〇班一八一人が現場に赴き、普及・啓発と調査に当たりました。

山菜採りに入林されている地域住民の皆様や捕獲従事者の方々から「こんな所まで来るとは」と驚きの声も聞きましたが、いい意味の緊張関係をもたらしたし、重大な事故、違反がなかったことになったと思います。検証結果等については、二年目の対策などを説明する地元協議会の場で報告したいと考えています。

クマに対する経験・技術の共有化

——ヒグマ対策については様々な議論があります。

今回の管理捕獲については、地元のある自然保護活動家は「例えばヒグマとの遭遇件数は、人間が山に入って遭ったのか、ヒグマが人里に下りてきたのかキチンと分けられていない。実態の把握が十分でないまま、一部市町村からの『獲れ、獲れ』という強い要望を受け、突っ走ったのではないか」と言っています。北海道自然保護協会でも「捕獲だけが先行することのないように、保護と共存を目指す総合的な対策の充実を求める」趣旨の質問状を出しました。人間とヒグマの不必要な軋轢を避け、問題行動グマを生まないための対策はどう進められているのでしょうか。

道では、渡島半島地域を対象として、

(1)人身事故の防止

(2)農作物など被害の予防

(3)ヒグマの地域個体群の存続

を目標とする保護管理計画を策定し、様々な施策を進めています。

例えば、あまり知られていないかもしれないかもしれませんが、ヒグマ出没地の数などの刈り払いを行うことにより、見通しが良くなり、出没の抑制効果が報告されています。

また、電気柵柵の設置を進める中で、農家から「柵の中にいると安心できる」という声も寄せられており、このように、地元とコミュニケーションを重ねることで、防除の必要性が普及していくものと考えており、こうした地道な対策も精力的に進めていきたいと考えています。

効果があれば、地元の意識も「クマは憎い」か

ら「奥山にはクマはいてもよい」に徐々に変化し、これまでのように「いたらすぐ駆除」といった、過剰な駆除を減らすことができるでしょう。

このほか、一時的にヒグマの出没を防ぐ風船状の防除資材設置などの実例を「ヒグマ対策実施の手引き」としてまとめ、昨年三月に道南の地元市町村をはじめとして、全道の市町村などに配布しています。ヒグマの誘引源となる生ゴミの処理、山に食べ残しを捨てないなど、人間側のモラル啓発についても、さらに徹底するよう訴えていく必要があります。

また、クマの生態を熟知し、危機に対応できる人たちの存在も重要です。

ベテランハンターを中心に「ベア・エクスパート・ネットワーク」の組織作りを進めています。これはクマに対する経験・技術を、社会全体で共有し引き継いでいくことが不可欠であると思うからです。あと十年もすれば、かつて春グマ駆除を経験した人は出勤できない年齢になりますので、山を歩ける人を残し、伝えていくため、今回は、若い人がベテランの捕獲従事者に同行して参加するケースもあったと聞いています。

いづれにしても、今後、多岐にわたる課題について、積極的に対応していきたいと考えています。